

初期友禅染に見られる寒色系色彩表現について

高木 香奈子（関西学院大学大学院）

友禅染という言葉は今日では色とりどりの彩色が施された華やかなイメージを抱かせる。しかし、この技法が行われ始めた貞享期から元禄初期にかけての遺品は必ずしもこうした特徴を示すものではない。近年存在が確認された元禄3年（1690）銘打敷（個人蔵）は年紀のある友禅染遺品の最も古い例であるが、ここに施された彩色は青、緑、茶という寒色系の色調を基調としている。このような色調は、友禅染という言葉が初出することでも注目される貞享4年（1687）刊行の『源氏ひなかた』の記述と一致する。また、元禄3年銘打敷に見られる絞り染で染め分けた白場に友禅染を施す方法も、貞享5年（1688）刊行の『友禅ひなかた』凡例の記述に一致する。これらのことから元禄3年銘打敷は17世紀末の初期友禅染の特徴を示す基準作として注目される。

この打敷と類似の友禅染遺品は数例確認することができるが、その多くに年紀銘はなく、なかには制作年代を下げて考えられてきたものもある。また、これとは別に初期友禅染の色調の特徴を示す染織品として、銘のある麻地の打敷も数例紹介されている。しかし、この打敷のなかには18世紀中頃を制作時期として想定するものもあり、これらの遺品全てを初期友禅染の範疇に入れてしまってよいものか検討が必要である。

そこで発表者は、元禄3年銘打敷とより近い特徴を持つ絹製の遺品に注目し、これらの時代的位置づけについて検討を行うこととした。絹製の遺品数は決して多くないが、このうちの3例に特徴的な模様表現を見出すことができた。その模様は葉や垣に施された露玉のような表現で、最盛期の友禅染には見られないものである。これと類似の表現が桃山時代には辻が花に多用され、この他刺繍にも例を見ることができる。江戸時代には寛文小袖に位置づけられるものに同様の表現を見出すことができ、友禅染最盛期以前に用いられた表現であると思われる。この模様について初期友禅染の特徴的な色調を有する遺品と、その他の友禅染遺品を比較し、また小袖意匠の構図なども併せて検討した。この結果露玉の表現は、露玉と葉に用いられた色によって寒色系の同色から異色へ、その後赤を含む異色へ移行すると考えられ、寒色系遺品は友禅染に生臙脂による赤色が多用される以前に位置づけることができる。

上記の例はいずれも寒色系の色調で模様の中を一色に塗りきるか、あるいは同系の色の暈しを入れるものである。このような特徴は麻製遺品にも見られ、さらに麻製のものには型による遺品が含まれている。注目したいのは友禅染が成立する直前に型染が多用されており、初期の友禅模様も型染技法と考えられる摺絵によって染められていたことである。これらのことを勘案し、初期友禅染の色彩的特徴に友禅染以前に行われた型染の影響があった可能性を示す。